

Denkens の中で回想されているごとく、フッサールの助手を務めつつ私講師として教壇に立っていた時代についてみる必要があると考えられる。

そこでは大戦後の混乱に戸惑う彼自身の具体的生と、アリストテレス以来のヨーロッパに伝統的な存在論の知識と、そして現象学的に物を見る目とがあり、それ等が相俟って『存在と時間』へと結びつく思索を形成していくと考えられるのである。ハイデッガーの思想形成期の一端が明らかになれば幸いである。

■ 2月25日

講演

身延文庫本『雑々私用抄』『甚深集』
紙背文書について

桃 裕 行
(史学科教授)

一般に古文書の紙背に典籍などを書写した為に残った所謂紙背文書には、意図的に遺したものでない為に思い懸けないものがある。身延山十三世日伝所持の標記の二つの聖教の紙背文書は、叡山西塔東谷に伝ったものとされ、鎌倉末から飛んで戦国初期に至る山上の法華会・山王講・六所彼岸講・慈恵大師講・湯次^{ニギハヤヒ}勸学講などの行事を伝え、湯次講は慈恵大師良源の生地と伝える近江浅井郡湯次庄と関係あり、同庄の三川村納帳は之を語っている。一方西塔の属する山城関係では、管領細川政元が根本中堂に抛る賊党の討滅を西塔に命ずる文書・政元の

被管守護代香西又六が課する山城寺社本所領「五分一」税の減免を請う文書・その山科七郷への強制入部に対する郷民の抵抗を語る文書などあり、信長の叡山焼討、政元・又六の滅亡によりそうでなくても遺る運命でなかった古文書が、ひそやかに紙背に息付いている。

講演

社会福祉の存在理由

田 代 不二男
(社会学科教授)

社会福祉は慈善事業から社会事業、社会福祉と発達してきた。この社会福祉がなくなることがあるだろうか。社会福祉の目的は、社会福祉をなくすることであると考えられたことがある。しかしこれは社会福祉発達の歴史を見れば、誤りであることがわかる。

それでは何故社会福祉は存在するか。社会福祉の存在は、資本主義社会の体制的矛盾の結果であると説く人もいる。社会主義社会では社会福祉は不要になるのか。とすれば、社会福祉はそれ自身では、人間生活に提供できる有益な要素は何もないのか。しかし社会体制にかかわりのない社会問題もあり、社会福祉の存在の正当性は、人生そのもの、社会そのものの本質から説明されると思う。

最後にソ連の実情について、1958年にアメリカからソ連へ行った調査団の報告を紹介し、また私の体験を述べて終りにしたい。